

2010.4.17

没後90年 ブルッフの代表作を聴く

❖❖❖ プログラム〈前半〉 ❖❖❖

今年にはショパン、シューマン、マーラーといった大作曲家の記念イヤーに注目が集まっていますが、調べてみると、ロマン派を代表するひとり、ブルッフの没後90年に当たっています。マックス・ブルッフは、ケルン生まれのドイツの作曲家で、生前はオラトリオやカンタータといった声楽曲で高く評価されていたようですが、今日では、今回お聴きいただく3つの作品によってブルッフの名は忘れがたい存在になっています、プログラムの前半は、その代表的な3作品でブルッフの魅力をじっくり味わっていただきたいと思います。

マックス・ブルッフ (1838~1920): チェロと管弦楽のための“コル・ニドライ” op.47

*「コル・ニドライ」とは「神の日」という意味ですが、ヘブライの古い聖歌と言われる「コル・ニドライ」の旋律を変奏曲風に発展させた幻想曲とも言える作品です。チェロ作品の重要な名作のひとつ。

ジャン・ワン (チェロ)

チヨン・ミヨンフン 指揮 NHK 交響楽団
(2000.5.6 NHKホールでのLive)

ヴァイオリンとハープと管弦楽のための“スコットランド幻想曲” op.46

* 1879年41歳の時、スコットランドの文豪ウォルター・スコットの詩に触発されて生まれた作品で、スコットランドの民謡を素材に、自由で色彩的なオーケストレーションをバックに美しく、優美に、時に絢爛たる独奏を奏でるヴァイオリンと、ハープが巧みに絡み合って聴き手を魅了します。

チヨン・キヨン・ファ (ヴァイオリン)

オイゲン・ヨッフム 指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1973..12.2 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ヴァイオリン協奏曲第1番ト短調 op.26 ~ 第1楽章、第2楽章、第3楽章から

* 1866年28歳の時に書かれた作品で、甘くロマンティックな味わいと美しく歌うブルッフの作風が最大限に発揮されたこのジャンルにおけるロマン派屈指の名曲のひとつに数えられています。当時の大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムに捧げられました。

アンネ・ゾフィー・ムター (ヴァイオリン)

ヘルベルト・フォン・カラヤン 指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1981.1.1 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)